

## 古ジャワ金言集 Ślokāntara 訳注研究（2）

安 藤 充

前編（1）に続き、Ślokāntara の第31偈から第60偈のサンスクリット韻文と、各偈の古ジャワ語散文解説を邦訳し、テキストの読みや訳出上の問題、典拠や類例の指摘などについて注記を加えていく<sup>1</sup>。

### 31.

「善き人は、たとえ貧しくとも、咎めをうける行いをしないものだ。虎は鉤爪<sup>2</sup>を切られても草を喰むことは決してない。」<sup>3</sup>

解説： 善き人とは最も高貴な生まれの人のこと。たとえ財はなく、憐れむべきであっても、悪行を犯してはならない。悪行を思い描いてもいけない。最上の生まれの者は決してそうあってはならない。喩えて言えば、彼は虎と同じだ。（サンスクリット偈の śārdūla（虎）とは（現地語では）macan のこと。鉤爪を切られ（獲物を捕れなく）ても、決して草を食べることはしない。そのような振る舞いをすることはないのだ。なぜならば、生まれつき何を食べるかわかっているからだ。このように聖典は述べる<sup>4</sup>。

### 32.

「火付け、毒盛り、呪術師<sup>5</sup>、刺客<sup>6</sup>、人妻取り<sup>7</sup>、謀反人、これら六つが凶悪犯である。」<sup>8</sup>

解説： 火付けとは、戦争目的以外の理由で町に火を放つ者である。神殿に火を放ち、師匠の家に火を放つ者、これが火付けである。刺客とは、襲撃する者である。人妻取りとは、人妻を奪い（その夫を）刺し殺す者である<sup>9</sup>。謀反人とは、対立を引き起こそうとする者で、とりわけ、王（と）大臣を誹謗し、その地の崩壊の原因となる言辞を弄する。その言葉はすべて妬みからのものである。邪悪な思いを行動にあらわす。口にすることすべてが偽りである。まさに裏切り者である。毒盛りとは、毒を飲ます者である。呪術師とは、黒魔術を使い<sup>10</sup>、（眼力で<sup>11</sup>）虜にし、陶酔状態にし<sup>12</sup>、悪行に仕向ける者である。為すことすべてが悪である。これが六種の凶悪犯と呼ばれるものである。

これら六種の行為は生涯してはならない行為であり、(すれば)地獄は必定である。(と

なると地獄に墮ちた) その人をヤマが釜茹でにし、獄卒たちが掻き回すことになる<sup>13</sup>、と聖典は述べる。

その後の転生はこうである。地獄の釜で茹でられた後<sup>14</sup>、砂糖椰子の繊維のように切り刻んで大地に散りまかれ、ついには散り散りに死んでゆく。

こうした者たちの行く末は次の通りである。

### 33.

「蠢いては悪をなす蛭、糞の中の虫、骨格のないその姿を世間は見ようとはしない。」<sup>15</sup>

解説: jalaukā とは蛭 (lintah) のこと。蠢いては悪をなすとは、思慮なく進み、先(に)ある)道に従わず、さ迷い、道を外れ、痒みを生じさせるような虫、たとえば、ムカデや蠍<sup>16</sup>などである。糞の中の虫とは、たとえば糞の中にいる蛆など、あらゆる類いの蛆虫のこと。骨のない姿とは、腹ばいで進み、骨格がなく、匍匐する。たとえば小蛇、クリチャック、蛭、チャチン、ワリヤなど<sup>17</sup>。これらはすべて世の中で忌み嫌われており、この世で六つの凶悪な犯罪をおかした者はこれらに転生するのである。(生前の)所行があまりにも罪深いゆえ、どこへともなく墮ちていくことになる。このように聖典は述べる。

### 34.

「顔は蓮の花弁のごとき美形、言葉は栴檀のごとく涼やか、(しかし)心は鉄<sup>18</sup>の性を帯びる—これは狡猾の相である。」<sup>19</sup>

解説: ある人がおり、その顔は花が開いたように優しく、赤い蓮華が咲いたよう。言葉はクールで、体に塗り込んだ栴檀香がひんやりするごとくであり、(他方)、貧しく憐れな人々には優しい(言葉をかける)。彼(について)は勇敢のことが話題にのぼるが、その心の中は鉄のごとくである。(サンスクリットの) kartra とは(古ジャワ語で) guntiñ (鉄) のことである。彼の悪意は鉄の刃先の鋭さのごとく、激しい嫉妬は、哀れむべき善人の首を切り刻み、途方もない苦痛を生ぜしめる。彼は毒入りの蜜に等しい。甘いのは確かだが彼の悪は死を招く。

これが邪悪<sup>20</sup>の相である。彼は猛毒カーラクター<sup>21</sup>を体現している。彼は地獄の底をかたどったものである。要するに、最上の生まれをもつ者はそのような行為をなすべきではない。このように聖典は述べる。

### 35.

「ひとは子供として、若者として、そして老人として、善行も悪行もおこなうが、再び生まれ、それぞれの時期に、(善行や悪行の果を)享受することになる。」<sup>22</sup>

解説: 人は子供のときに、善き行いをすると、別の生においてその善き結果をうける

ことになる。また同じ子供のときに悪しき行いをすれば、(別の生で)子供のときに悪(い結果)をうけることになる。中年のときに善行をすれば、(別の生で)中年のときに善い結果をうけることになるし、悪行をすれば、別の生で中年のときに悪(い結果)をうけることになる。そして、ひとが年老いて善行をすれば、(別の生で)老年期に善い結果をうけることになるし、悪行をすれば、別の生で老年期に悪(い結果)をうけることになる。

善行悪行をおこなった顛末はこのようであり、享受されない果実はない。転生してから得られるのである。それゆえ、幼少期から老年期まで、善なる精神をもって行為をなすべきである。(そうであれば)別な生に至って、幼少期から老年期まで、幸福を得ることになるだろう。このように聖典は述べる。

### 36.

「雑草やクシャ草で満足する獣たちに、黄金など何の価値もない。果樹で満足する猿たちに、宝玉など(何の価値もない)。悪臭を喜ぶ豚たちに、芳香など(何の価値もない)。(同様に)人間にとって、その究極なるものは好ましいものではない。」<sup>23</sup>

解説：獣たち、(たとえば)鹿<sup>24</sup>は、黄金や装飾品を与えられても嬉しく思うことはない。彼らがうれしいのは、森が美しい草、丈の高い草、食べられる草に満ちあふれているときである。それこそ喜びを感じる時である。同じように、猿たちも、あらゆる高貴な宝玉を与えられても嬉しくはない。しかし果実が熟してたわわに実のを見ると歓喜する。同じように、豚はどんな芳香にも喜びを感じないが、悪臭放つゴミ溜めの不潔さこそ、(豚の)心に歓喜をもたらす。

このように、人間も、望んでいないものに対してそのようになるのか(たとえば)、そうはならない。すばらしいと思われる<sup>25</sup>もの、それにひかれる。それが人が(さまざま)生を享ける理由である。あるいは下等に生まれ、あるいは幸せな人となり、あるいは下僕に、あるいは頭領に、あるいは愚かに、あるいは有能に、あるいは醜く、あるいは麗しく、あるいは悪人に、あるいは善人に、(そしてその転生先として)あるいは人間に、あるいは獣に、あるいは木に、あるいは蔦に、あるいは草に生まれる。それから、天界か地獄かを見ることになる。それらはどんな様相なのか。自分の領地のすみずみまで支配を及ぼす者、それは天界と呼ばれる。彼はインドラ神に擬せられる。その人を信奉する家臣たちはあたかも半神ウィデャーグラのごとくである。天啓聖典に通曉した儀典官や司祭者<sup>26</sup>であって、あらゆる聖典や論書の真理を一片も欠けることなく修得している者は、ウリハスパティ尊師と呼ばれる。一方、醜く愚かで憐れ、病持ちで、大いなる苦に苛まれる者は、地獄(行き)である。とりわけ、尋常ならざる痛みに押しつぶされる者はそうである。すべての動物、草や木、蔦、蟻に至るまでのものは言わずもがなで、これらすべて(この世で)生育するものは、地獄(行き)である。

それゆえ、正しい行いをなすべきである。大叫喚地獄<sup>27</sup>に陥ることがないように。それを知る者は、正義の法に通じている。順法精神<sup>28</sup>がなければ、大地獄<sup>29</sup>と呼ばれる。(地獄 niraya の) nir とは「ない」という意味である。aya とは「行為」という意味である。(合わせて) 正しい法を実践しないという意味になる。<sup>30</sup>

したがって、地獄への道は回避しなければならない。天界への道へこそ進むべきである。法はこのように教える。これが教義と呼ばれるものである。このように聖典は述べる。

### 37.

「勇猛、健康、疚しいところのない快樂<sup>31</sup>、神々への誠信、黄金の獲得、王の寵愛、善き人々に好かれること—これらは天界から下った者たちの特徴である。」<sup>32</sup>

解説：ここで天界から下った者 (swarga-cyuta) と呼ばれる者について説明する。それは天界における楽を享受した後、インドラ神の世界から降下してきた人である (と一般に言われる) が、(実は) そうではない。この世における外見からそう呼ばれるのであるから、それを述べよう。

家柄として最も高貴に生まれた者がいる。たとえば王である。彼は最高の生まれを体現し、すべてを支配し、極めて裕福である。正義を重んじる心は彼のような人にある。王はいろいろな人間の性質をよく知り、臣下や憐れな民を慈しみ、奴婢の過ちを赦し、暑熱を避ける覆いとなり、雨季には傘となる。不意の客でも常に大切にもてなす。北から、南から、東から、西から (の客を)。家臣らを満足させる。支配下にある兵卒ら<sup>33</sup>には苦痛を与えない。明るくこまめに人に話しかける。彼の志には、プラーマナ僧も村僧もシヴァ教と仏教の僧も敬意を表す。学匠と呼ばれる者もみな彼を称賛する。彼の話ははるか遠くまで伝わり、世界中で称えられる。

王は次々と (罪人を) 殺すことはない。重罪でなければ、次々と処刑するというわけではない。もし王に殺された、処刑されたという者がいるとすれば、その罪が (処刑) 相当とされての後である。それも、聖典の規定に照らしてのうえである。司法官が王の臣下の悪行を調べ、その違法性を立証して、それから罰が下されるのである。正しい基準に従って、その地の守護者たる王が刑罰を与えるのである。罰せられた者に恐怖を与えることはない。なぜならば、正しき法とは、罰の執行、すなわち、悪事を犯した者に対して刑罰を与えることであるから。そのような (悪) 人がいて、(罰せられて) 死んだ場合、善なる法が伴っていき、〔この世の) 命が尽きた後には、高貴な生まれに再生することになる。王に生まれることもある。その地で重要なところに生まれるということに関して言えば、彼の転生はこのようである。

(偈の) 勇猛 (śūratwa) とは、勇敢さを身をもってあらわすことである。戦闘では敵うものなしである。健康 (ārogya) とは、命ある間は体が病に侵されないことである。

快樂 (rati) とは、国中で待望されることである<sup>34</sup>。神々への誠信 (deweṣu bhaktih) とは、神への確固たる信心のことである。黄金の獲得 (kanakalābha) とは、黄金で大いに富むことである。王の寵愛 (rājapriyatwa) とは、王に愛される者たちの権化たることである。

これらが、善行の布施をおこなう者たちの特徴である。同等の生まれの者たちの中でもっとも善徳が高い。こうした人々が天界から降下した人と呼ばれるのである。このように善き人が語ったという。

### 38.

「四種の人間が黄金の花咲く大地を楽しむ。知略者、勇者、碩学、優しく語る者。」<sup>35</sup>

解説:大地で黄金の花を享受すると言われる者は四種である。(目的を成就するための) 方策を立てることに通じ、敵の策略に通じる者は、知略者と言われる。戦闘において勇猛で、匹敵する者がいない者は、勇者と言われる。聖典や論書の教えに通曉し、あらゆる原理で知らぬところがない者は、碩学と言われる。鼯鼠の大物衆に仕える技芸に秀で、愛技の論典の知識を駆使する珠玉の女たちをあまた (知り)、女性に愛される者は、優しく語る者と呼ばれる。

もしこのようであるとすれば、それは優れた人が徳高き行為をおこなった<sup>36</sup>結果である。あるいは人が苦行の聖戒を固持した結果であるかもしれない。このように聖典は述べる。

### 39.

「挑発<sup>37</sup>、多弁、朝令暮改<sup>38</sup>、知性超越<sup>39</sup>。賢者には (こうした) 汚れた言葉は受け入れられない。」<sup>40</sup>

解説: そのような言葉は賢者に考慮されるに値しない。大事にされる地位にふさわしくない。(偈の) 挑発 (wāda) とは、(他の) 王と戦いを交えたいという気持ちを露にした<sup>41</sup> (王の言葉)。多弁 (bahuwākya) とは、王がしゃべりすぎることである。朝令暮改 (wacanapunah-punah) とは、王の発言に一貫性がないことである。知性超越 (jñānāgamyā)<sup>42</sup> とは、王の欲が深すぎ、判断すべきことが多すぎることである。

これらは王がしてはならないことである。してしまった場合は次のような罪過を招く。臣下らは心中穏やかではない。なぜなら王の知性に問題があることを怖れるからである。王の大臣らは追従しなくなるだろう。お仕えする者がいなくなるだろう。王の命令は一つも遵守されないだろう。そのような王はもはや家臣らに愛想尽かされるだろう。このように聖典は述べる。

### 40.

「荒くれた主人は見捨てるべきである。荒くれた主人よりも、けちな主人こそ見捨て

るべきである。けちな主人よりも、見境のない主人こそ見捨てるべきである。見境のない<sup>43</sup>主人よりも、恩知らずな主人こそ見捨てるべきである。」<sup>44</sup>

解説：従者らは、(次のような場合)王を見捨てるべきである。行いが激烈で熱狂的な王は、明らかに臣下らによって見捨てられる。(しかし)激烈な王も、卑しく暴虐な<sup>45</sup>王よりはましである。そのような王は臣下らに見捨てられる。(しかし)卑しく暴虐な王も、分別のない<sup>46</sup>王よりはましである。分別がないとは、秩序を乱すことである。(たとえば)高貴な生まれの者を軽んじ、下賤の生まれの者を重用すれば、それは秩序を乱すと言われる。そのような王は、高貴な生まれの者たちに見捨てられる。しかしながら、秩序を乱す王も、恩知らずよりはましである。恩知らずとは、気が狂っているということである。とめどなく人を刺し<sup>47</sup>、とめどなく人を縛り上げ、わけもなく人を襲い、わけもなく人を吊るし上げる。罪もないのに...し<sup>48</sup>、罪もないのに火あぶりにする<sup>49</sup>。これらのあらゆることを恩知らずはやってしまう。そのような王がいれば、臣下らは(王の姿を)見て慄き、恐怖で目を閉じ、身震いする。大臣や顧問の心は、あたかも蛇にお仕えしようとしてもするかのようなようである。戸惑い身動きができず、心は恐怖で震え上がる。このように聖典は述べる。

#### 41.

「供犠や布施も、苦行や火供も、梵行も、真実語も、天啓聖典を全て修めるといふ誓いも否。この世のものではないことの果実が得られるのである。」

解説：王はこれほどの権力を獲得していること、王の威力が途絶えることなく行き渡っていること、王の得るものが多大であること、その理由はいったい何なのか。というのでも、供犠も行わず、学匠への布施もせず、苦行もせず、火供も行わず、梵行も守らず、発言に誠実でもなく、あらゆる天啓聖典を学修することも意識せず、戒も守らず、ブラーマナ僧も村僧もシヴァ教僧も仏教の僧も大事にすることがないからだ。にもかかわらず、王は果実を得ている。彼の力は絶大で、減退することがない。では王が果実を得ている理由はといえば、かつて(前世で)苦行や戒を固く守ったからである。それゆえ、減退することなき獲得があるのである。かつての苦行や戒の果実が尽きた<sup>50</sup>とき、獲得の方法を憶えておらず、供犠をせず、学匠への布施をしなければ、来世で下賤に生まれること必定である<sup>51</sup>。その転生での落胆は途方もなく大きい。身に受ける苦痛は際限ない。目に見えて穢されている。この世に転生して、(過去世で)王のときにおこなった悪行のすべて(の果を)享受しているのである。

それゆえ、王たるものは無気力であってはならない。再び権力を手中に収めるべく、正しい法を常に心に留めなければならない。これは人間のあり方としてはなかなか困難なことである。あたかも農民のごとくである。彼らが(しっかり)田で働けば、米の収穫は量り知れないほどになる。再び栽培の時期となっても彼らが田で働けなければ、収

穫は得られない)。このような喩えがある。人間の体は水田のごとし、家族は苗床。水田が休耕中で手が入れられていなければ、米を生育させることなどあり得ようか。そうはならない。その田は草木が生い茂ってしまう。草とは何(の喩え)か。伸び広がる感覚器官の総体である。木とは何(の喩え)か。強い貪欲、迷妄、陶酔、驕慢、嫉妬、暴力である。これらは六群(の敵)<sup>52</sup>とよばれる。貪欲とは、他人の所有物を我がものにしたいたいという思い<sup>53</sup>である。迷妄とは、心がどんより暗く翳ることである。陶酔とは、富に酔いしれることである。驕慢とは、仲間の中で際立ったところもないのに、自分が優れていると思うことである。嫉妬とは、同類の者に怒りを感じることである<sup>54</sup>。暴力とは、人殺しである。邪悪な(転)生の原因は、六群の敵による。そしてさらに、憐れむべき転生は六群の敵が強大であるからである。(そこでまた)酷い<sup>55</sup>どん底の不幸に苛まれることになる。獣に生まれたら言わずもがなで、(不幸は)さらにひどいことになる。このように聖典は述べる。

## 42.

「男になびきやすい女、判断力のない王、守るに値しないそれらの者に対し、大臣は、距離をおいて、努めて見離すべきである。」

解説：男に対して誠実でない女は捨てるべきである。同じように、知性が劣り、牛飼いの子<sup>56</sup>のような心の王は、大臣が見捨てるべきである。王や女性の本性はそのようである。彼らの行動が悪ければ、守るに値しないから、それを理由に、遠ざけるべきである。努めて遠ざけるように、怠りなくせよ。このように聖典は述べる。

## 43.

「酒搾り、虫焦がし、人殺し、瓶作り、金細工。これら五種(の職)がチャンダラとして知られる。」<sup>57</sup>

解説：次の五つが世間ではチャンダラと呼ばれる。何かといえば、酒搾り(surāsut)とは、ヤシ酒を搾り出す職人である。虫焦がし(kṛmidāha)とは、洗濯屋のことである。人殺し(prāṇaghna)とは、刺客のことである。瓶作り(kumbhakāraka)とは、瓶を作る職人である。金細工(dhātudhagdhā)とは、黄金を細工する職人である。以上の五種(の職)がチャンダラと呼ばれる。満ち足りている人々が彼らの家を訪れるのはよろしくない。チャンダラのように貶めてしまう<sup>58</sup>からである。このように聖典は述べる。

## 44.

「鳥の中ではカラスがチャンダラである。獣の中ではロバがチャンダラである。人間の中では、怒りっぽい人がチャンダラである。全ての中では、悪人がチャンダラ

ラである。」<sup>59</sup>

解説：鳥の中では、カラスほどのチャンダラはいない。獣の中では、野生のロバほどのチャンダラはいない。人間の中では、激怒する人ほどのチャンダラはいない。(しかし)すべてのチャンダラも悪人には敵わない。それはチャンダラの中で突出している。なぜならば悪人が望むのは仲間の命を奪うことだからである。このように聖典は述べる。

#### 45.

「かの人は牛革鞣の話聞くが、王様、私は聖者らの言葉を聴聞している。王様は明らかにこのことをお見通しだ。美德や悪徳は人との交わりによって生じると。」<sup>60</sup>

解説：もし下賤の人と交われば、下賤な悪人の気根と通じてしまう。同じように、善き人と交われば、善き人の気根と通じ合う。例え話はこうだ。二羽の緑オウムがいる。名前はガワークシャとギリカ<sup>61</sup>。どちらか一方は、猟師に捕らえられ、育てられたとする。もう一方は、学匠に捕らえられ、育てられたとする。そんな中で、王様が狩りに出て一人で道に迷う。王は導かれて猟師の家に来て来る。そこにはオウムのギリカがいる。そのオウムが王にこう話す。「ほらほら、頭かち割るぞ。」オウムがこう話し、王がそれを耳にする。その(恐ろしい)言葉を聞いて、王は逃げ去る。やがて(王はまた)導かれて学匠の道場に赴く。そこにはオウムのガワークシャがいる。オウムはこう話す。「王様、ああ何たる幸せ、ありがたきこと、王様が道場にお立ち寄り下さるとは。どうぞ一休みを<sup>62</sup>。ヤシの葉を編んだ新しい敷き物の上にお座りください。ビンロウの実や新鮮な葉、(あるいは)生のライムをお囓みください。もし王様がお疲れでしたら、泉で水浴びをどうぞ。」オウムが王にこう話す。王はオウムが話すのを聞いて驚きを感じる。とうとう王は学匠に、彼が育てたオウムについて尋ねる。学匠が答える。自分が面倒を見て育てたのだと。

これが善き人の要点である。すなわち、人との交わりはしっかり(相手を選ばなければ)ならない。自らの徳を増やすようにすべきである。悪人との付き合いは禁物である。なぜならば、地獄行きとなるからである。このように聖典は述べる。

#### 46.

「欠点もあり、美点もあり。欠けるところなく生まれ来る者なし。蓮は泥より生じ、茎に棘あり。」<sup>63</sup>

解説：人間というものに生まれて、欠点がないということはない。人は、その美点が世間で称えられても、人間であるということによって欠点がある。たとえ裕福であっても、どれだけ聖典を学んで博識でも、どれだけ姿形が麗しくても、(この世に)誕生することによって欠点を身にまとう。



要するに、完璧で欠けるところがないという者はいない。あたかも蓮華のごとくである。蓮華は実にその清楚さが話題になる。いったいどんな欠点があるか。それは痒みを生じさせることだ、と人々は言う。

#### 47.

「蓮華は棘に満ち、ヒマラヤ山には雪があり、栴檀には蛇が住まう。太陽は激烈、月の姿は兎に汚され、海は水が苦い。ヴィシュヌ神は牛飼いで、神々の主は気まぐれ、シャンカラ神は喉元が黒い。これらはみな、欠点を具している。この世の人々に欠点があるとしてそれが一体何だというのか。」<sup>64</sup>

解説：欠点のないものはない。それは前に(も)述べた。蓮には棘がある。それが欠点だ。山は雪のために冷え込む。それが欠点だ。栴檀の木には虚穴に蛇がたくさんいる。それが欠点だ。月は(勾形の)影<sup>65</sup>で汚されている。それが欠点だ。海は水が苦い。それが欠点だ。太陽は陽射しが強烈だ。それが欠点となっている。ヴィシュヌ神は牛飼である。それが欠点だ。インドラ神はかなりの移り気である。それが欠点だ。シャンカラ神はカーラクータの毒<sup>66</sup>のせいで首が黒い。それが欠点だ。

要するに(ここに)名が出たもので欠点のないものはない。神々にも欠点があつてそれが付着している。ましてや人間にはどれだけ(欠点が付着しているだろうか)。欠点がないものはない。違いは(欠点が)多いか少ないかである。善き人々は皆、欠点が少なくなるように努めてしかるべく行動しなければならない。このように聖典は述べる。

#### 48.

「5年は王のごとくに、10年は下僕のごとくに、16年からは友のごとくに。これが子供の教育である。」<sup>67</sup>

解説：子供に指示を与えるやり方は(次の通りである。すなわち)、年齢で5才までは、王子に仕える者が王子に教えて差し上げるようにすべきである。自分の息子が成長して、(5才から)10才になるまでの間は、召使いに命じるように教育すべきである。子供が(さらに)成長して、16才になったら、友人に教えてあげるように教育すべきである。

子供にものを教え伝えるにはこのようにすべきである。このように聖典は述べる。

#### 49.

「溺愛から多くの欠点が生まれる。鞭撻から多くの美点が生まれる。ゆえに子供や弟子には、寵愛ではなく、鞭撻があるべし。」<sup>68</sup>

解説：子供が努力を嫌い<sup>69</sup>、辛抱が利かなければ、罪過を積むのは必至である。(他方)息子が打擲される、(すなわち)教育上の体罰で傷を負うとしても、必ずや美德を積むことになる。したがって、子供や生徒への体罰は多大な美德を心がけてなされるべきで

ある。溺愛は禁物である。このように聖典は述べる。

## 50.

「嫁入り、借金償却、法施、蓄財、敵、知識、火、病<sup>70</sup>に対して、時を浪費してはならない。」<sup>71</sup>

解説：時間を無駄にかけるのはよろしくない（のは次の事柄である）。娘を嫁にやる、借金を完済する、正義に則りお布施をする、富を得る、敵を殲滅する、知識を得る、火を消す、病を治す。これらはすべて時間の浪費をしてはならないものである。このように聖典は述べる。

## 51.

「他人でも幸福を授ける者は身内、身内でも不幸をもたらす者は他人。体内で生じた病は患いとなるが、森で生じた薬草は吉祥である。」<sup>72</sup>

解説：他人であっても、（わが）体に幸をもたらしてくれる者は身内と呼ばれる。身内であっても、（わが）体に幸をもたらさない者は他人と呼ばれる。病気は（わが）体内にあって（自分を）殺そうとするので、敵と呼ばれる。一方、薬草は、体に幸をもたらす。森に自生するのに、人々が探し求める。このように照らし合わせて見られるのは誰のことか。

それはスグリーワである。彼はバーリという兄に苦しめられ、他方、ラーマとラクシュマナは、他人であるにもかかわらず、森の中でスグリーワが探し求めた<sup>73</sup>。（彼らが）スグリーワの苦痛を癒す薬草であったからだ。

このように、（自分にとって）兄弟でも親族でも、自分の体を害しようとする者は、明らかに敵であるといえる。（反対に）他人であっても、自分の身を生かしてくれる者は、それこそ<sup>74</sup>、親族、兄弟と呼ばれる。このように聖典は述べる。

## 52.

「月は夜の灯火、太陽は（日中の<sup>75</sup>）灯火、正義は三界の灯火、善き息子は家の灯火。」<sup>76</sup>

解説：夜には月が灯火となる。昼は太陽が灯火となる。三界においては正義が灯火となる。家においては善き息子が灯火となる。このように聖典は述べる。

## 53.

「同じ腹から生まれ、同じ星宿の下に生まれても、同じ振る舞いをする<sup>77</sup>わけではない。ナツメの棘のごとく。」<sup>78</sup>

解説：子供というのは、同時に同じ母胎から生まれ、両親が同じ名前を付け、まったく瓜二つの兄弟で、生まれ落ちた日も星座も同じであっても、それでも、それぞれの考

えが同じであることはない。例えば、同根のナツメの棘で、真っ直ぐなものもあれば、曲がったものもある。それは (同じ人の) 息子たちの考えと同じである。このように聖典は述べる。

#### 54.

「妻という蛇に搦め捕られる者、息子を溺愛する者、渴愛の火に身を焦がす者、彼らにとって、捨離こそが妙薬である。」

解説：ある女を妻とするも、その女が悪心を持ち、蛇の輪索<sup>79</sup>を体現する (かのように)、体に巻き付き、首のあたりにとりつく、(そのようにされる) 男。息子が欲しいという欲望にとらわれる男。渴望が身を燃やす、(そのようにされる) 男。(男を苦しめる) それらは毒であるが、それに対する薬はいったい何か。それは (それらのものを) 捨て去ることしかない。このように聖典は述べる。

#### 55.

「年増でも財産のある女、醜女でも働き者の女、貧しくとも器量のよい女、これら三種の女は、賢者が侍らす対象となる。」

解説：妻を娶る男は、年をとっていても富裕な女は娶るがよい。また、器量は悪くても、知性が抜きんでている女は娶るがよい。憐れなほど極貧でも美貌に満ち溢れている女は娶るがよい。これら三種の女を、賢者は妻にする<sup>80</sup>。このように聖典は述べる。

#### 56.

「財はなくとも家柄がよければ、聖典の知識はなくとも再生族であれば、臣下はおらずとも世の王なれば、バラモンですら敬意を表する。」

解説：家柄が高貴な人は、憐れむべき状況にあらうとも、生まれが優れているゆえに尊敬に値する。同様に、バラモン<sup>81</sup>は、ウェーダ聖典 (の知識) が乏しくても、その生まれゆえに尊敬に値する。同様に、王は、臣下が少なく、兵士も財も戦車も僅かであっても、人々が尊敬するに値する。さらに、王として、バラモン、行者、シワ教や仏教の僧侶らによっても敬意を表される。このように聖典は述べる。

#### 57.

「卑劣な者には暴力が力、高潔な者には堪忍が力、王にとっては刑法が力、女にとっては従順が力。」<sup>82</sup>

解説：悪人がその力の源とするのは、生まれが同等の者を殺めることである。すばらしい徳をもつ人にとっては、自制<sup>83</sup>が力の源となる。自制とは、(あらゆる) 人に平等に優しくすることである。動物に対してすら、苦しんでいるときには憐れみをかける。

同様に、王は刑法がその力の源である。刑法とは、聖典や論書に基づいて刑罰を下すことである。一方、女性の力であるが、女性にとっては従順であることがその力の源である。従順とは、夫に対して誠実で<sup>84</sup>、すべて夫の意思に従うことである。このように聖典は述べる。

## 58.

「蛇には牙に毒あり。愚者の毒はその心にあり。敵への表敬は毒。女たちには曲がった挙措が毒。」

解説：蛇は牙に毒がある。それと同様に、愚かな悪人はその心に毒がある。幸福に縁がない者<sup>85</sup>は、人を殺めることを力の源とする。さらに女は夫に対して小言が多く、そこに毒がある。このように聖典は述べる。

## 59.

「不勉強な者には論書は毒、消化悪しき者には食事は毒、貧しき者には会話が毒、老いた男には若き女が毒。」<sup>86</sup>

解説：望んでいないにもかかわらず<sup>87</sup>、論書を学ぶ者、そのような者にとって論書は毒となる。同様に、お腹の中で消化不良を起こしていて、欲していないにもかかわらず食事をする者、そのような者には（食事が）毒となる。貧しき者は、自分が話すことすべてが毒となる。なぜなら、憐れむべき生まれの者が話すことすべてが、物乞いではないか<sup>88</sup>と金持ちに思われてしまうからである。このように聖典は述べる。<sup>89</sup>

## 60.

「童女は、恋心に無縁。月経があれば乙女。乳房が大きくなれば魅せる女。愛神の矢にうたれれば艶やかな女。」<sup>90</sup>

解説：年若い女性で、まだ恋心の兆しがなければ童女 (kanyā) と呼ばれる。しっかりと月経がある女性は乙女 (yuwatī) と呼ばれる。乳房は張り出し<sup>91</sup>ても、体の交わりを経験していない女性は美女 (kāntā) と呼ばれる。さらに、愛神の矢に射ぬかれ、その武器による（血の）迸りがちょうど尽きたばかりの<sup>92</sup>女は熟女 (pramadā) と呼ばれる。このように聖典は述べる。

### 〈訳注〉

1. テキストの梗概については安藤2015参照。サンスクリット偈と古ジャワ語散文解説の訳し分け、略号表記などは前編に準ずる。
2. pāda: 一般的には「足」、「paw」(OJED)の意味だが、文脈に合わせて訳しておく。解説の

- 方では現地語で jariji ("finger, toe") (OJED) と、的確な訳語を当てている。
3. Sharada Rani は類例として、Indische Spruche [IS] 5930 などに収録される次の句を挙げて  
いる (1957, p.164) : vane 'pi simhā mṛgamāmsabhuktā bubhukṣitā naiva tṛṇaṃ caranti / evaṃ kulīnā  
vyasanābhībhūtā na nītimārgaṃ parilaṅghyati // . (肉食のライオンは森で飢えても決して草を食  
むことはない。同様に、家柄良き者は、災難に見舞われても人倫の道を踏み外すことはない。) 肉  
肉食獣を例にするなど本句と内容はかなり近いが、言い回しや対比物が異なっており、本句  
の直接の典拠とは見なし難い。
  4. liñ in aji: 前編 (安藤 2015)、注31 参照。
  5. atharwa: OJED (Zoetmulder 1982) は、「(主に病気や災害を鎮めるための呪文からなる) ア  
タルワウェーダ」との意味を示すが、本文脈では、インド由来の呪法の聖典のことを指して  
いるはずはない。あくまで、古ジャワ語解説が的確に示すように、ひとに災いをもたらす呪  
術をおこなう者のことと解すべきだろう。
  6. śastragha: サンスクリット辞書に登録がなく、Gonda の *Sanskrit in Indonesia* [SI] (1998) で  
も取り上げられていない複合語だが、後分の ghna を "striking with, killing, killer, murderer"  
(MW) ととれば、「凶器で人を殺す者」と理解できる。英訳もそのように解している。
  7. dārātikrama: この語だけでは意味が取りづらいが、後続の古ジャワ語積 (注9 参照) を参  
考に、複合語前分の dārā は自分の妻ではなく他人の妻を指すとし、また後分の atikrama は  
"overcoming, conquering" (MW) の意味に取っておく。
  8. 現行の Manu 法典刊本では、凶悪犯 ātatāyin については「グル、子供、老人あるいは学識・  
人物の最も優れたプラーフマナ (パフシュルタ) であれ、殺意を持って襲いかかる者 (ア  
ータターイン) は躊躇なく殺してよい」(8.350) (渡瀬 2013, p.236) と言及するだけで、本偈  
のような分類説明はない。しかし *Vasiṣṭha Dharmasūtra* では本偈のように六種を挙げてい  
る : agnido garadaś caiva śāstrapāñir dhanāpahaḥ / kṣetradāraharaś caiva śad ete hy ātatāyinaḥ //  
(3.16) . このうち、火付け、毒盛り、妻の掠奪の3つは本偈に等しい。なお Manu 8.350 の異  
読および注釈にも、*Vasiṣṭha Dharmasūtra* と同じものが含まれている。サンスクリットと  
古ジャワの ātatāyin については、安藤 2001, pp.13-15 参照。
  9. ambahud anris: OJED は "to kill a man in order to take possession of his wife" (s.v. bahud) と踏  
み込んだ解釈を示しているが、元々、bahud (他人の妻と通じる)、kris (短剣) の他動詞形  
を連ねて成り立っているので、原語を反映させるように訳出しておく。
  10. manēluḥ: サンスクリットの atharwa の古ジャワ語訳。OJED (s.v. tēluḥ) の解釈に従う。
  11. andeṣṭi: OJED は deṣṭi の項内に登録し "to bewitch" と意味を示すが、あわせて "with the evil  
eye? (Cf. dṛṣṭi)" と、仮想される基語からの類推で、「眼」の力によって魔法にかける意味合  
いを示唆している。ここでも、その解釈を括弧付きで採用しておく。
  12. amēmēṅḍēm: OJED は pēṅḍēm ("burying") か mēṅḍēm ("drunk") のいずれかからの派生と  
して、魔術で、何かを埋めてしまうのか、あるいは酔わせるのか、の可能性を示している (s.v.  
pēṅḍēm)。ここでは文脈から暫定的に後者に取っておく。
  13. kinēla de bhaṭāra Yama inarwakēn prāṇanya de niñ kiñkara: kinela ((("to cook, boil" [受動態])  
及び inarwakēn ("to stir st. (where it is cooked in water etc.)"[受動態])という動詞を使っており、  
少し後の kawah ("cauldron") に連なっていく叙述である。
  14. wuwus: このまま ("what is said, words") では意味が通らない。huwus ("finished, done")  
なら文脈が通じる。
  15. サンスクリットの格が乱れており、Sharada Rani の修正 (1957, p.175) に従って大意をとつ

- て訳しておく。しかしながら、例えば、サンスクリット偈の *jaṅgamapāpam* は、文法と意味からすれば *jaṅgamaḥ pāpī* とすべきだが、古ジャワ語解説部分でも *jaṅgamapāpam* とそのまま引用しているので、テキスト成立時にサンスクリットの転訛がすでに起こっている可能性にも留意しなければならないだろう。なお *Sharada Rani* によれば、サンスクリットの典拠は見つからないが、古ジャワ文献では *Kuñjarakarna* に生前の悪行から爬虫類に墮するという一節がある。Kern 1922, p.75 参照。
16. *kalalupan*: OJED は *kala* ("scorpion") の下位項目として *kala lupa* ("a part. kind of scorpion") を挙げ、本書の例文も引くが、末尾に *n* がつく語形については "sic?" と疑問を呈しているのので、テキストの読みを *kala lupa* と訂正すべきか。
17. *kuricak* ("some crawling creature"), *cacin* "worm", *warya-warya* ("a kind of crawling animal") と、いずれも腹ばいの虫の類いとして列挙されているのはわかるが、それぞれを特定できず、とりあえずカタカナ書きをしておくしかできない。前二者については、古ジャワ語文献 *Tantri Kāmandaka* [TK] (160.11) でも言及されている。
18. *kartra*: 本来のサンスクリットでは *kartari* ないし *kartrī* だが、古ジャワ語解説部分でも *kartra* としている。*Gonda* は、インドネシアに伝わるサンスクリット語でインドにはない *a* 語幹男性名詞化している例としてこの箇所を引いている (SI, p.416)。
19. ほぼ同一の詩句が IS 4882 にある。本テキストの *kartra* が *kartrī* に、*ity etad* が *trividham* となっている所のみが異なる。
20. *duṣṭa*: サンスクリット偈では *dhūrta* とし、外面と内心の異なる、ずる賢しさを表現している。古ジャワ語解説も、この前では毒入りの蜜という的確な解釈を示しており、表現を変えた意図が不明である。
21. *kālakūṭa*: サンスクリット文学において、乳海攪拌のときに生まれた毒で、シヴァ神が口にしたために首が青黒くなったとして知られる。この文脈での言及の意図は明らかでないが、古ジャワ文献でも、ラーマヤナ他で言及されており、毒という連関で、古典をふまえた知識として提示されたのかもしれない。なお本テキスト第47偈の解説中にも言及がある。
22. Mbh 12.174.15 は本偈と同一。IS 4447 も、第4句 (*tatphalaṃ pratipadyate*) 以外は一致する。古ジャワの金言集 *Sārasamuccaya* [SS] 361 はサンスクリット偈は完全に一致するが、古ジャワ語解説部分はそれぞれ独自の叙述となっている (Raghu Vira 1962, p.282)。
23. TK 21-22 偈とその古ジャワ語解説 (Hooykaas 1931, p.38) は、転訛ないしはテキストの崩れが甚だしいものの、本偈および古ジャワ語解説と対照すれば、両者はかなり相似していることがわかる。
24. *kidañ mañjañan*: OJED は *kidañ* を "barking deer (*Cervulus muntjac*)", *mañjañan* を "deer" とし、さらに、古ジャワ語詩作品には *mañjañan* は現れないとする。後者の *deer* がどの分類のシカを指すのか不明で、両者の訳し分けが難しいため、ただ鹿としておく。英訳は "deer and stags" (シカとアカシカ) と並列する。
25. *winiṣeṣakēn*: OJED (s.v. *wiṣeṣa*) " (pf.) to consider superior, give one's preference to" に従う。
26. *bhujaṅga mwañ brāhmaṇa wedapārāga*: *bhujaṅga* と *brāhmaṇa* が並記されるが古ジャワ語において両者の区別は明瞭ではない。OJED (s.v. *bhujaṅga*) によれば、前者は、古い文献では学生や弟子といった年齢の若いバラモンを指す傾向にあり、後代、マジャパイト朝以降では、"religious official" を指すとする。なおインドからインドネシア世界における *bhujaṅga* の意味の変遷については *Gonda* が SI で詳しく論じている (pp.557-561)。
27. *mahārorawa*: 古ジャワ文献では *Agastyaparwa* [AP] (*Gonda* 1935, pp.352; 382) や *Sutasoma*

- 32.8で言及されている。
28. *buddhi-dharma*: 刊本ではこのようにハイフンで複合語のように示されるが、文脈からすれば、*buddhi dharma* として、*buddhi* を *dharma* が後ろから意味限定していると解したほうがよいと思われる。
29. *mahāniraya*: AP (p.354) にも見られる。Gonda は SI で、*mahāniraya* に言及するのは古ジャワ文献では AP のみとしている (pp.240-241)。他方、OJED では本書の例のみを引いている。
30. MW は *nis+ti* ("egression from earthly life") または *nir+aya* ("without happiness") と原義を示している。ここでは、古ジャワ解説者が文脈に沿った独特のパラフレーズをしていることがうかがえるが、サンスクリットの捉え方は的確である。
31. *ratir avadyā*: *avadya* は文脈とは正反対に "not to be praised, blamable" といった意味なので、Sharada Rani (1957, p.193) もこの読みには問題があるとしたまま、英訳では "blameless" と仮に訳している。ここでも大意に沿って訳しておく。
32. 天界から現世に堕ちた者の特徴を述べる詩句としての類例は IS 7315に見られる：  
*svargacyutānām iha jīvaloke catvāri nityam ḥṛdaye vasanti / dānaprasaṅgo madhurā ca vāñī devārcaṇaṃ sadgrusevanaṃ ca //* ここでは4つが明確に示されるのに対し、本偈は項目の数が多く、内容もはっきりしないものを含み、直接の関係性は薄い。
33. *thānibala*: OJED (s.v. *thāni*) は *bala thāni* として、本テキストの読みとは語順の倒置した形を登録し "common troops, rank and file" という訳語を示している。
34. 偈の *avadyā* (注31) については何ら言及がない。また、*rati* が本来もっている性的な意味合いの喜びとは大きく異なり、王に対する国民の思いといった独特な解釈を施していることが注目される。
35. IS 7133 (=MBh.5.35.64) は三種の人間を挙げ、うち二項目が本偈と一致する：  
*suvarṇaṇuṣṭhāṇāṃ pṛthivīm cinvanti puruṣāḥ trayāḥ / sūras ca kṛtavidyāś ca yaś ca jānāti sevitur //*
36. *mañulahakēṇ puṇyadharmā*: OJED は *puṇyadharmā* を登録するが、複合語かどうかについて 'compound?' と疑問を呈し、意味も "(the virtue of) generosity, favour?" とはっきりしない。ここでは *dharma* を "virtuous" といった形容詞的意味合いにとって、同義語の並列と解釈しておく。
37. *vāda*: 古ジャワ解説からの類推で、"dispute, quarrel" (OJED) の解釈を援用しておく。ただし、ここでの複数属格形は用をなしていない。
38. *vacanāni puṇaḥ puṇaḥ*: 次から次へと異なる発言がなされるという意味か。古ジャワ解説に準じて訳しておく。
39. *jñānagamyā*: サンスクリット的には「知識によって到達(成就)される」と訳するのが順当だが、OJED は本例を引きながら複合語後分を *gamyā* でなく *agamyā* と読み替え (*jñānāgamyā*)、"unsuitable to the mind" という意味を疑問符付きで示している。ここでは、それに従っておく。
40. Sharada Rani (1957, p.95) は "Sanskrit is not clear" として英訳を示していない。列挙される語句の格がばらばらであるのが問題だが、何らかのことばに関する禁忌が説示されているものと理解して仮に訳出しておく。
41. *tūr*: このままでは意味がとれず、(h) *atur* からの類推で "appearance" に関わる意味で仮に訳しておく。
42. サンスクリット偈における読み替え (注39) に連動して、こちらも後分を *agamyā* とする。
43. ここでは *aviśeṣa* という表現だが、明らかに直前の *aviśeṣajña* を受けているのでそのよう

- に訳す。
44. IS 7530 は d の箇所 (tasmāc ca kṛtanāśanam) 以外は本偈と同一である。古ジャワの箴言集 *Nītiśāstra* (NS) に類似した内容を古ジャワ語で表現した詩節がある (15.9) : riñ bwat kṛpāṇa ya kasora riñ ardha kopa / riñ warṇasaṅkara lēhēñ juga tañ kṛpāṇa / yapwan kṛtaghna kalēhēñ juga tañ mañampuh / yekā gatinya pilihēñ tēkap in sinewa //。ここでは、激しい怒りく吝嗇くカースト混淆く恩知らずという並びであり、項目は必ずしも同一ではないが、kṛtaghna というサンスクリット由来の語を用い、それを最後にもってきている点が、本テキストとの関連で注目される。
45. paraḍaṅḍa: MW にはこの複合語の登録はない。OJED ("tyrannical, inclined to violence (or inclined to extortion?)" ) は本例のみ引いている。
46. awiśeṣa: 偈の後半で awiśeṣajña にかえて awiśeṣa としている (注43) ことと関連しているかもしれない。ただし、古ジャワ語では awiśeṣa だけでも "not making the proper distinctions" という意味もある (OJED) ことに留意しなければならない。
47. anēñewēk: このままでは解読できないので、anēwēk (>tēwēk) ("to stab) と読み替える。
48. hañumuwwang tan padoṣa: añumu の基語および意味が不明。OJED は仮に umu を登録し本例を引くが、humu ないし kumu も疑問符付きで並記し、英訳の意味を示していない (p.2119)。
49. añobor-obor: OJED は疑問符付きで "to torture with torches" の意味を示し、本例のみを引く。見出し語 obor 自体、"ModJ?" としており、この語の由来が不確かである (p.1216)。
50. hanti: hēnti ("used up, finished") と読み替える
51. niyama ta yan paratra: Sharada Rani (p.97) はこの部分を訳出していない。ここでは niyama を OJED に従い "certainly, evidently" の意味にとっておく。
52. ṣaḍwarga: 古ジャワ文献ではよく知られた概念で、ほかにも ṣaḍripu、ṣaḍśatru といった表現で、最古の *Rāmāyaṇa* (13.52) ほか、詩作品 (ex. *Bhārayayuddha* 36.17)、仏教文献 (ex. *Sutasoma* 11.1)、箴言集 (ex. *Nītiśāstra* 14.6) など、各種文献に言及される。サンスクリットでは、IS 1638 が次のように六種を挙げる : kāmāḥ krodhas tathā lobho harṣo māno madas tathā / ṣaḍwargam utsrjed etam asmiṃs tyakte sukhī nṛpaḥ //。 *Hitopadeśsa* (4.102) や *Kāmandakīyanītisāra* (1.57) にもほぼ同一の詩節がある。*Arthaśāstra* は第六章を indriyajaya つまり感覚器官の抑制と題し、その第一に ariṣaḍvargatyāga、つまり敵の六群の退治を掲げている。その中で、kāma・krodha・lobha・māna・mada・harṣa をこの順で挙げる。古ジャワ文献における ṣaḍwarga およびサンスクリット文献との関連については別稿を予定している。
53. harēp drēwya niñ len bisañkuhira: 最後の語の区切りや意味が不明で、英訳者も ... と回避している。bisañku の部分は、文脈と語形から、bisa ("capable, able") の何らかの派生形に一人称所有の接尾辞 - (ñ) ku がついたものかという類推から仮に訳しておく。
54. asēñhi ti samajanma: samajanma ("fellow man") はサンスクリット由来風ながら、MW には samajāti ないし samajātīya は登録されているが samajanma はない。OJED も本テキストの用例 (第16偈解説) の用例のみ載せている。SI には言及がない。
55. tan sipi: sipi と tan sipi がいずれも "very, to a high degree" の意味をあらわすことについては OJED (s.v. sipi, pp.1783-1784) 参照。
56. raray añwan: 英訳によれば "cow-boy" だが、後分の añwan の解釈が不明。牛飼いだとしても、立てるに値しない王の形容としては意味が通らない。
57. 本テキスト第29ではこの五種を含む八種をチャンダーラとして挙げている。安藤2015,



- p.74参照。いずれもサンスクリット由来風ながらもサンスクリット辞書に見当たらないこれらの職種の用語について、Gonda は SI で本例から取り上げて言及している (p.289)。
58. añṇḍālani: OJED の示す "to behave like a caṇḍāla" よりも、英訳の "(they) defile" の方が意味が通るので、それを参考に訳しておく。
59. Cf. NS1.8: yan riñ pakṣi tinucca kāka hinaran pāpātmaka ñ caṇḍāla / riñ sarwamṛga gardhabhēka hinaran tuccātmaka ñ caṇḍāla / riñ buddhiki tinucca caṇḍāla si kopānde hilāñ niñ kṣamā / riñ durmitra cinaṇḍālēñ jana kasor tañ caṇḍāla trīnucap //。内容的には本偈とほぼ同一。ただし本偈の古ジャワ解説は、これを写したものではなく、言い回しがかなり異なっている。
60. Cf. IS 4795: ahaṃ munīnām vacanaṃ śṛṇomi gavāśanānām sa vacaḥ śṛṇoti / na tasya doṣā na guṇā mamāpi saṃsargajā doṣaguṇā bhavati //。c の部分が異なるのはもちろんだが、saṃsargajāña と saṃsargaja の相違が文脈を変えていること、そして、IS の方が私と第三者の対比が明瞭であることも注目される。
61. Gawākṣa と Girika をオウムの名前としているが、サンスクリット偈の gavāśana と giras の誤解を元に、オウムのエピソードを導入ないしは創作したのだろうか。Sharadra Rani が "it is strange that.." と誤解に当惑する (p.220) ように、他では見られないほどの原文からの逸脱の事例である。オウムのエピソード自体が往時よく知られていたことも可能性の一つだろう。なお gawākṣa という語は OJED では "round window" の意味として *Wirāṭaparwa* (85.23) の例を引いており、他方、Sharada Rani は AP に例があるとす (p.220)。
62. araryana ta laki: ここで laki はオウムから王 (男性) への呼びかけと解釈する (OJED s.v. laki)。
63. 類例が IS 2988 にある: doṣo 'py asti guṇo 'py asti nirdoṣo naiva jāyate / sukomalasya padmasya nāle bhavati kaṇṭakah //。前半は本テキストと同一。後半は本テキストの第3句、第4句は格が乱れ、論旨の混乱もあるのに対し、IS 所収のほうがすっきりしている。
64. 素晴らしいとされるものにも欠点があることを列挙する金言には、IS 2250 や IS 6432 などの類例がある。Sharada Rani 1957, pp.224-225 参照。ただし本偈が挙げる項目とは必ずしも一致しない。他方、古ジャワ語の NS にも同類の言及があり (4.5)、本テキストの内容にかなり近い: .. sañ hyañ Indra bahulocana vṛṣaṇa nirēki tan gēñp / sañ hyañ candra cihna niñ śaśa bhāṭāra rawi sira mahōṣṇikaprabhā / sañ hyañ śāñkara nīlakaṇṭa paśupāla cacad ira bhāṭāra keśawa //。
65. wuñkukan: OJED によれば、サンスクリットの aṅka の古ジャワ訳で、"the mark on the moon" の意味。英訳は "hunchbacked" とするが、これは wuñkuk の原義をとったからと思われる (OJED s.v. wuñkuk)。
66. kākakūṭa: 注21参照。
67. Cf. IS 5747: rājavat pañca varṣāñi daśa varṣāñī dāsavat / prāpte tu ṣodaśe varṣe putraṃ mitravad ācaret //。前半は varṣa の格が異なるもののほぼ同一。後半は言い回しが異なるが内容は等しい。他にも IS 7345 は rājavat を svāmivat として他は5747と同一である。
68. Cf. IS 5847: lālāne bahavo doṣās tāḍane bahavo guṇāḥ / tasmāt putraṃ ca śiṣyaṃ ca tāḍayen na lālayet //。前半部分の処格表現、後半の動詞表現が本テキストとは異なるもののほぼ同一。なお NS 4.21 は古ジャワ語詩節で lālana よりも tāḍana という同内容を謳っている: haywāñlālana putra sañ sujana doṣa tēmah ika wimarga tañ wuruñ / akweh sañ sujanātilar swatanayanya pisanīnu tikañ warāñganā / yapwan dīkṣita tāḍanēnulahakēñ tēmahan ika suśīla śāstrawāñ / nityēncarcana riñ wadhūjana sira ñ wara sujana lulut mañastuti //。
69. サンスクリットでは lālana は "the act of caressing, fondling, coaxing" を意味するが、OJED

- は "to amuse os., sport, relax; to do things at one's ease, shun serious work" という意味を示し、本例を引いている。古ジャワ語解説の文脈からしても、溺愛という意味では通じず、安楽な方に流れている様相を述べていると解釈するのが妥当だろう。
70. śatruvidyāgniroga: 本来であれば偈の前半部のように、敵の～、知識の～、火の～、病気の～という対処を表現すべきところを、韻律の都合からか、～の部分を省いて列挙している。古ジャワ語散文部では、それを的確に補って解説している点が注目される。
71. Cf. IS 3115: dharmārambha ṛṇacchede kanyādāne dhanāgame / śatruvidyāgnirogeṣu kālakṣepaṃ na kārayet // 語順や部分的な表現の相違以外、趣旨も列挙項目も完全に一致する。TKには前半部が本テキストともISとも多少異なるサンスクリット詩節と、その古ジャワ語解説が含まれる (p.30)。ただし解説部分は本テキストとは叙述が異なる。
72. IS 3988は本偈と同一。*Hitopadeśa*にも同一の偈が含まれている (3.96)。
73. 明らかにラーマーヤナに依拠している。
74. prasiddha: 文脈から、OJEDで2番目に掲げられている "indeed, really... actually" の意味にとる。Gondaがこの語について、サンスクリットの "accomplished; arranged; well known" から古ジャワ世界での意味展開を論じている (SI p.525)。なお、対になっている前の文では mawās ("clear") を用いている。
75. 月との対比から意味合いを補って訳しておく。古ジャワ語解説部分では的確に yan iñ rahina と表現している。
76. IS 6428は本偈と同一。古ジャワのTKにも崩れた形ながら同じサンスクリット偈があり、解説が古ジャワ語で加えられている (p.36)。本テキストの古ジャワ語箇所とは叙述が異なっている。さらに古ジャワの NŚ に古ジャワ詩でほぼ同一の内容が述べられている (4.1) : sañ hyañ candra taraṅganā pinakadīpa mamaḍaṇi ri kāla niñ wēni / sañ hyañ sūrya sēḍēñ prabhāsa makadīpa mamaḍaṇi ri bhūmimaṅḍala / widyāsāstra sudharma dīpa nikañ tribhuwana sumēnō prabhāsvara / yan iñ putra suputra sādhu guṇawān mamaḍaṇi kulawandhuwandhawa // 三界の灯火を単に dharma でなく「正義にもとづいた学問・論書」としている点が少し異なる。
77. samācāra: 文脈から所有複合語として解釈しておく。
78. Sharada Rani は取り上げていないが、*Cāṅakya Nīti* 5.4 にほぼ同一の詩節が含まれており、それと同一のものが *Mahāsubhāṣitasamgraha* 7713 として収録されている: ekodarasamudbhūtā ekanakṣatrajātakāḥ/ na bhavanti samāḥ śīle yathā badara- kaṅṭakāḥ // 本偈よりもこちらの方が、特に b と c において格段に意味がとりやすい。
79. nāgapāśa: 偈の bhujaṅgapāśa を受けているが、古ジャワ文献では *Arjunawijaya* 60.4 で用いられているように何らかの武器 ("a sort of magical noose or lasso used in battles", SI p.245) のようだ。この語については Emeneau 1960 参照。
80. siwinēn: OJED で siwi の他動詞とその受動態がしばしば「(女が) 男を夫にする、(男が) 女を妻にする」を意味するとしていることを採用する (p.1796)。
81. brāhmaṇa: 偈にある dvija を的確に解釈していることがうかがえる。
82. Cf.: IS 7391: hiṃsā balam asādhūnām rājñām daṅḍavidhir balam/ śūsūrūṣā tu balaṃ strīñām kṣamā guṇavatām balam // 同じ詩節が Mbh 5.34.72 にある。本テキストの b の部分が d の位置にきているのと、a の王の形容詞が異なっている以外は、趣旨も表現も同一である。
83. kopaśaman: 偈では kṣamā だが、古ジャワ解説では upaśama ("tranquility of mind") の派生形で表現している。kṣamā 自体が古ジャワ文献でも用いられていることからすれば、訳者の誤解あるいは曲解によるものか。

84. satya malaki: ここでの malaki を "towards one's husband" の意味にとる。OJED (s.v. laki, p.957) 参照。
85. tan rowaṅ in enak: 偈の ahita を訳したもののだが、偈の文脈では MW も OJED も示す "enemy" という意味が妥当であるのに対し、解説では, hita ("benefit, good, welfare") に否定辞 a- がついたものとしてパラフレーズして訳しているようである。
86. Cāṅakyanīti 4.15 は本偈と完全に一致する。NŚ 1.3 は、同内容の古ジャワ語の偈である : riṅ widyā wiṣa tulya de nikaṅ anabhyāsāsaṅ sampēnēh / yan tan jīrṇa tikaṅ bhinojana hatur wiṣyātēmah wyādhanya / riṅ hīnārtha daridra tulya wiṣa goṣṭinyātēmah maṅlare / riṅ kanyā wiṣa tulya riṅ jaḍa pikun tanpāmṛtānde wiṅit //. ここでは a に widyā, d に kanyā というサンسكريット由来語を用いている点異なるが、参照したサンسكريット原典でそのように表現していたのか、古ジャワ翻訳者が言い換えたのかは不明である。
87. yan harēp tan pārēp: 英訳は "whether he likes it or not" とするが、文字通り「欲しない(という)意思を持つ」と解釈して訳しておく。偈の anabhyāsa ("want of practice or skill") とは意味を異にしている。
88. dinalih harēp: [(何かを) 欲している (harēp) と疑われる (dinalih)] と解釈して訳す。
89. 偈の d 部分については古ジャワ解説は全く取り上げていない。
90. Sharada Rani はサンسكريット金言研究の泰斗である R. Sternbach 博士からの教示として、本テキストの偈が示すような女性の世代分類も、同類の詩節もサンسكريット文献には見つからないとしている (1957, p.254)。
91. kapētēk: " (pf.) to push in , press down" という語義からは、押さえ押し込まれているイメージだが、乳房の脈絡にあてはめるとすると、ふくよかになったものが上衣で締め付けられていることを表現しているかもしれない。そのように仮に訳しておく。
92. wahu-wahu māri kasatan pañēne niṅ sañjata: kasatan (>sat) を "dried up, dried out, become drained", pañēne (=mañēne>kena) を "to hit" の意味にとるが、māri (>ari) の "to cease" という意味との関連がよくわからず、指し示すことがはっきりしないが、生々しい恋愛沙汰を乗り越えた妙齢の女性という意味か。

<参考文献>

- Bötlingk, O. von  
1966 *Indische Sprüche*, 3 vols., Osnabrück (reprint) .
- Emeneau, M.B., N  
1960 Nāgapāṣa, nāgabandha, sarpabandha, and related words, *Bulletin of the Deccan College Research Institute*, vol. 20, no.1, 1960, pp.291-300.
- Führer, A.A.  
1983 *Śrīvāsiṣṭhadharmaśāstram*, Delhi (reprint) .
- Ganapati Sastri, T.  
1990 *The Arthasāstra of Kauṭalya*, 3 vols., Delhi (reprint) .
- Gonda, J.  
1933 *Agastyparwa, een Oud-Javaansch proza-geschrift*, 's-Gravenhage.  
1998 *Sanskrit in Indonesia*, Delhi (reprint) .

- Hooykaas, C.  
1931 *Tantri Kāmandaka*, Bandoeng.
- Juynboll, H.H.  
1912 *Wirāṭaparwa: Oudjavaansch prozageschrift*, 's-Gravenhage.
- Kale, M.R.  
2004 *The Hitopadesa of Narayana*, New Delhi.
- Kern, H.  
1900 *Rāmāyaṇa kakawin, Oudjavaansch heldendicht*, 's-Gravenhage.  
1922 De legende van Kuñjarakarna, in: Kern, H., *Verspreide Geschriften X*, pp.1-76.
- Mandlik, V.N.  
1992 *Mānava-Dharma Śāstra*, New Delhi (reprint).
- Monier-Williams, M.  
1982 *A Sanskrit-English Dictionary*, Oxford (reprint).
- Olivelle, Patrick  
2005 *Dharmasūtra Parallels*, Delhi.
- Poerbatjaraka, R.Ng.  
1933 *Nītiśāstra, Oud-Javaansche tekst met vertaling*, Bandoeng.
- Raghu Vira  
1962 *Sāra-samuccaya: a classical Indonesian compendium of high ideals*, New Delhi.
- Rajendralala Mitra (ed.)  
1960 *The Nītiśāra or The Elements of Polity by Kāmandaki*, Osnabrück (reprint).
- Sharada Rani  
1957 *Ślokāntara: an Old Javanese didactic text*, New Delhi.
- Soewito Santoso  
1975 *Sutasoma: A study in Jawanese wajrayana*, Delhi.
- Sternbach, L.  
1963a Sanskrit subhāṣita saṃgraha-s in Old-Javanese and Tibetan, *Annals of the Bhandarkar Oriental Research Institute*, Poona, vol. 43, pp.115-158.  
1963b *Cāṇakya-rāja-nīti maxims on Rāja-nīti, compiled from various collections of maxims attributed to Cāṇakya*, Madras.  
1966 *Subhāṣita-saṃgraha-s as treasuries of Cāṇakya's sayings*, Hoshiapur.  
1974 *Subhāṣita, gnomic and didactic literature*, Wiesbaden.  
1974-2007 *Mahā-subhāṣita-saṃgraha: being an extensive collection of wise sayings in Sanskrit*, vols. 1-8, Hoshiapur.  
1979 *On the influence of Sanskrit gnomic literature on the gnomic literature of Old Java and Bali*, Torino.
- Sukthankar, V.S., Belvalkar S.K. et al (eds.)  
1933-1966 *The Mahābhārata, for the first time critically edited*, Poona.
- Supomo, S.  
1993 *Bhāratayuddha: an Old Javanese poem and its Indian sources*, Delhi.
- Teeuw, A. and S.O. Robson  
1981 *Kuñjarakarna Dharmakathana*, The Hague.

Zoetmulder, P.J.

1982 *Old Javanese - English Dictionary*, 2 vols., 's-Gravenhage.

安藤 充

2001 『古ジャワ版ヒンドゥー法典類に関する基礎的文献研究』(平成10～平成12年度科学研究費補助金(萌芽的研究)研究成果報告書)

2008 『古ジャワ語世界におけるシヴァ教の受容と展開』(平成16～平成19年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書)

上村勝彦〔訳〕

1984 『カウティリヤ実利論』岩波書店(岩波文庫)上・下

1992 『ニーティサーラ』平凡社(東洋文庫553)

渡瀬 信之(訳注)

2013 『マヌ法典』平凡社(東洋文庫842)

